

しょうれんあん かや ふ 松連庵の茅の葺き替え

日本の茅葺(かやぶき)、檜皮葺(ひわだぶき)、柿葺(こけらぶき)の技術は、2020年にユネスコの無形文化遺産に登録されました。これらの技術は、自然素材を建築に生かす知恵と、周期的な修理を見据えた材料の採取や再利用など、古代から工夫を重ねて発展をしてきた高度で伝統的な建築技術です。

松連庵のような茅葺屋根は、大正時代くらいまで日本の住宅ではよく見られました。定期的に葺き替えが必要な茅葺屋根の場合、茅の栽培、刈り取り、葺き替えなどの維持管理を個人ですることは難しく、村や集落の仲間で協力をして葺き替える結(ゆい)という組織で順番に屋根を修理していました。日野市内にも結の記録が残されています。



葺き替え前の松連庵 (2022 撮影)



葺き替え後の松連庵 (2024 撮影)

葺き替えの様子

屋根に葺かれた茅は雨風にさらされて次第に薄くなります。屋根の性能と茅の耐久性から20年から30年で葺き替えが必要になります。前回の葺き替えは平成19年(2007)におこなわれました。今回の葺き替えは3か年計画で実施されており、令和4年は東面する屋根が対象となりました。

松連庵の屋根は茅の根元を下に向けて重ねていく真葺き(まぶき)という方法で葺かれています。屋根の傾斜は45度ほどあり、軒先から頂部まで13段に分けて茅が積んであります。一番上の部分には棟仕舞(むねじまい)といって、積んだ茅の上を杉皮(すぎかわ)で覆い、その上をひしぎ竹で押える竹箆巻(たけすまき)を施します。雨が漏れるのを防ぐ大事な作業です。軒の端部は、職人さんの心意気が感じられる、ほれほれとする仕上がりです。今回、東面する屋根(115㎡)に葺かれた茅は厚さ45cmから75cmで、その総重量はおよそ8トンにもなります。



屋根に茅を載せます。



長くて重い針と呼ばれる道具に縄をつなぎ、屋根裏まで刺し通して茅を梁(はり)に固定します。



積み上げた茅の先端部をガンギを使って叩いて整えます。同じ作業を13段繰り返します。



棟に竹箆巻(たけすまき)を施している様子。

道具と職人

